

幼小接続における教育課程の編成に関する研究

A Study Related to Curriculum Design in the Connection between Kindergartens and Elementary Schools

齊 藤 多江子

SAITO, Taeko

Abstract

The purpose of this study is to analyze the process of the storage and the connection of the outcome of study, and to consider a necessary plan to curriculum design in articulation between kindergartens and elementary schools, and through putting the study contents. The results was as follows :

- 1) Interaction activity children is the chance for teachers to understand the difference to the way of thinking and values in education, and teachers will promote mutual understanding educational method and common recognition.
- 2) It's important that teachers understand the connection of learning and experience from kindergartens to elementary schools.
- 3) It's necessary to make clear the ability that we would desired to bring up and to organize the bottom-up curriculum to the reality of the children.

キーワード：教育課程、幼小接続、共通理解、ボトムアップ

I. 目的

近年、「小1プログラム」「学級崩壊」の問題意識から、「幼小連携」「幼小接続」の必要性が盛んに論じられるようになった。この問題意識は、幼稚園に対し小学校への準備教育を求める動きを起こしつつ、幼稚園教育と小学校教育との間の、教育方法や学校文化における「段差」の大きさに起因する問題と捉え、双方が教育活動を再考しようとする動きに広がった¹⁾。

行政の動きとして、平成10年(1998)に中央教育審議会を取りまとめられた答申「新しい時代を拓く心を育てるために」において、「幼稚園・保育所から小学校への接続が円滑に行われるようにするため、情報提供の充実や教育内容の一層の連携が求められる」と明記されている。また、平成13年(2001)「幼児教育振興プログラム」では、「幼稚園と小学校の連携の推進」が具体的に実施すべき施策として掲げられ、「幼稚園教育と小学校教育との間で円滑な移行や接続を図る観点に立って、幼稚園と小学校の連携を推進する」と明記されている。

幼小連携において目指されるものが幼児教育から小学校教育への「円滑な接続」とされている以上、「交流」と

いった枠のみではなく、幼稚園・小学校のカリキュラムをつなぐこと、つまり、「接続」にまで視野を広げる必要がある²⁾。

しかしながら、現状の幼小連携の取り組みとしては、「交流」活動は、従来より比較的さかんに行われてきたが、「教育課程をつなぐ」という意味での「接続」の活動は理念的なものにとどまっており、具体的方策の提示は数少ない³⁾。

一方、これまで行われてきた幼小連携に関する研究は、幼児と児童の交流、教師間の交流(人事交流も含む)や相互理解、幼小における教育課程(カリキュラム)の編成と、大きく3つに分けることができる⁴⁾⁵⁾⁶⁾。具体的方策の提示が少ないとされる「教育課程」に関する取り組みであるが、研究においてはこれまでどのように進められ、どのような成果があったのであろうか。このような観点から研究を整理したものは数少なく、全体的な傾向を報告したものか、もしくは典型的な事例についての分析を加えたものに限定されている。

そこで本研究は、個別の研究内容を整理することを通して、研究の積み重ねの過程や成果のつながりを分析し、幼小における教育課程の接続に必要な方策について検討することを目的とする。

II. 方法

CiNiiで「幼小連携」及び「幼小接続」をキーワードに検索すると、470件が抽出された(2016年9月1日現在)。その中から、学会発表要旨及び一般雑誌を除き、教育課程について言及している48論文を抽出した。これらはすべて平成12年(2000)以降のものであり、その多くが保育実践や授業実践の検討を通して、教育課程の編成を行なう上での実態把握や資料収集をしたもの、教育課程の編成を試みたもの、単元開発や教材検討等であった。

そこで本研究はまず、2000年以降における教育課程の編成を目的とした実践研究に着目し、分析・検討を行なう。それに加えて、出版物として確認できる3編も含めた。

また、2010年11月には、文部科学省より「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」が出され、幼児期と児童期をつながりとして捉える工夫として、「接続期」という捉え方の概念を普及することが示されている。そこで、2010年以降は、「接続期」にも着目して、教育課程の研究内容を分析することにした。

さらに、分析を進めていく過程において、「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」の教育内容に関する研究は、幼小接続における教育課程の編成・開発を進めるうえで重要な基礎研究となると考えられたため、そこにも目を向けることにした。

III. 教育課程編成を視野に入れた実践研究

1. 交流活動を通じた取り組み

まず、教育課程の接続を実現する方法の一つとして、幼小連携実践において主に行われている「交流活動」を通して、教育課程の編成を視野に入れた研究について整理する。

① 東京都中央区有馬幼稚園・有馬小学校⁷⁾

文部科学省の研究開発学校の指定を受け(幼稚園のみ)、平成11~13年度(1999~2001年度)の3年間、「幼稚園と小学校の連携を視野に入れた教育課程の研究」というテーマで実施された。幼児教育における教育内容が「くらし」「社会」「文化」という視点で、小学校の各学年の教育内容のどこにつながるのかを明らかにするために、小学校の学習指導要領の内容と比較し、つながりをとらえている。

また、幼児にとって中心的な交流は小学校の子どもたちとの交流活動であった。小学校とは、一つの活動が次の活動につながっていくプロジェクト型の交流であったが、学びの履歴として、出会いの過程や活動間のつなが

りを整理し、学年ごとの年間の流れとしてまとめている。

② 兵庫教育大学附属幼稚園・小学校⁸⁾

附属幼稚園では、「子どもの発達の連続性を探る一幼小連携の実践を通して」というテーマで、平成14~16年度(2002~2004年度)3年間にわたり研究を進めている。小学1年生が幼稚園に来て、幼児園児の遊びに小学1年生が参加する形での交流、幼稚園年長組が小学校に行き、「生活科」の授業に参加する形で交流する活動を通して、子どもへの気づき、交流活動への気づき、カリキュラム上での気づきについて、教員同士が話し合っている。その結果、内容についてもっと整合性、連続性をもたせるために共同の保育指導案の作成の必要性を感じ、幼小交流指導案として、3つ異なる活動場面に対して保育指導案の作成を試みている。しかし、幼小交流活動に対する共同の保育指導案作成にとどまっており、教育課程の編成までには至っていない。

③ 山梨大学附属幼稚園・小学校⁹⁾

平成14~16年度(2002~2004年度)3年間にわたり、附属幼稚園では研究テーマを「育ちの過程の連続性を考える一幼小の連携を通して」とし、附属小学校の協力を得て実践研究を行っている。年長と小学1年生を対象とした1年間にわたる交流活動を「テーマ共有活動」と名付け、遊びや学びの活動を創造している。

秋山・加藤(2004)⁹⁾は、その後付けではあるが、年長と小学1年生の接続のカリキュラムとして、活動のプロセスを反省や課題に至るまで整理を試みた。その中で、この取り組みの意味や価値は、「子どもたちのなかに育ってきた力、育てたかった力は何か」ということを問うことの重要性を、教師間で共通に認識されるプロセスにあると指摘している。

④ 北海道教育大学附属函館幼稚園・小学校¹⁰⁾

平成15年度(2003年度)から研究テーマが「幼稚園から養護学校まで、全附属学校の連携」に設定され、実践研究が進められた。幼稚園では平成14年度(2002年度)から「人とのかかわり」を広げることが研究テーマとして実践しており、いろいろな人とのかかわりを広げることによって、子どもたちの経験を量的・質的に高めることを大切にできていた。このような中で、附属小学校との交流は、人とのかかわりにおける発達の効果を高めることを目的に、カリキュラムの一環として取り入れられている。「みんな友達交流」の名称で、幼稚園と小学校の行事に合わせて、年5回ほど、基本的には幼稚園の年長組と小学1年生を対象に実施された。

教育課程が幼稚園と小学校との共同で開発され、連続

的に運用されることが研究の最終的な目標としているが、本研究においては交流活動の実践を資料として残すことに留まっている。

2. 小学校に新科目を設定することで教育課程を編成

① 鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園・小学校¹¹⁾

文部科学省の研究開発学校の指定を受け、平成13～15年度(2001～2003年度)の3年間、「幼小の連携教育」というテーマで実施された。まず、幼稚園教育要領の「領域」と小学校学習指導要領の各教科の記述を比較、そのつながりを検討し、それに関連する事例を考察することによって、幼稚園における遊びを小学校以降の教科の窓口から整理することを試みている。その中では、子どもの学びの連続性が確かめられている。

さらに、幼稚園から小学校に滑らかに接続するために、附属小学校では、「段階的分化カリキュラム」を作成し、小学1年生の学習を「生活学習」と位置付けた。「生活学習」は、幼稚園で培われた「生活的な学び」を重視する新たな科目であった。教科の枠を取り外し、子どもたちの興味・関心から課題を見出し、それを追求・解決していく過程の中で、教科の内容を学んでもらおうというものである。また、附属幼稚園と一緒に実践レベルにおいて幼小の「合同保育／授業」を計画的に実践している。「生活学習」、「合同保育／授業」において教育課程の編成を試み、単元開発や指導案作成を実施している。

② 広島大学附属三原幼稚園・小学校¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾

井上ら(2004・2005・2006・2007・2008)は、小学4年生以降の子どもの効果的な学力の習得を保障するために、附属三原幼稚園と三原小学校での実践をもとに、幼稚園(3～5歳児)と小学校低学年(1年生～3年生)の教育内容を見直し、子どもの経験が階層的に生かされるカリキュラムを提案している。1年次は、既存の教育課程を基礎とし、小学1・2年生の教科構成を、「国語科」「算数科」「体育科」の他に、「チャレンジ科」と「表現科」の2つを追加設定し、教科内容の設定および単元開発を行なっている。2年次は、教科構成を「国語科」「算数科」「体育科」「音楽科」「図画工作科」「発見科」「表現科」の7教科に設定し直し、幼稚園と小学校6年間の学びのつながりを意識したカリキュラム試案(目標や題材設定)に基づき、「発見科」では生き物を、「表現科」では落ち葉を題材とした単元開発を行ない、幼稚園・小学校双方において実践を行っている。3年次は、「発見科」の導入に伴う変化を検討するために、小学1～3年生に対して、類似性を見つける2課題を実施し、観点ごとに評定を行なった。また、「表現科」の導入に伴う変化の検討については、幼稚園における保育効果を検討するために、表現に

かかわる行動観察を通して4段階で評定、小学校においては課題を通じた表現活動に対して8観点で評定している。その結果、すべての観点において、小学1～3年生において評定が伸びており、子どもの経験を階層的に生かしたカリキュラムが有効であったと結論づけている。この結果を受け、4年次には、幼稚園年長に「発見・表現の時間」を設定し、小学校における「発見科」「表現科」との関連を考慮した単元開発の実践検討、5年次には、4年次の成果を受け、幼稚園における「発見・表現の時間」の活動内容の開発、小学校での「発見科」「表現科」を見据えた3年間(年長・小学1・2年生)の目標系統図を作成している。

3. 「接続期」の設定¹⁷⁾

「接続期」という概念を生み出したのがお茶の水女子大学附属幼稚園・附属小学校の実践研究である。文部科学省の研究開発学校の指定を受け、「幼稚園と小学校の連携を重視した教育」というテーマで、平成14～16年度(2002～2005年度)3年間にわたり研究が行われた。幼稚園5歳児の10月から小学1年生の1学期までを「接続期」とし、幼稚園→接続期→小学校という筋道に立って教育課程の編成が行われている。そして、「接続期」だけに焦点を当てるのではなく、幼児教育と小学校教育の教育課程全体を「接続」という考えに基づき、9年間を見通した教育課程が編成された。教育課程の編成は、幼稚園の時期を、「からだ」「もの」「ことば」「なかま」という4つの保育分野で構成し、この4分野をベースとしながら、接続期(接続期中期から「もの」→「かず・かたち」、小学校期(「ことば」「うた」「からだ」「アート」「なかま」「しぜん」「さんすう」と、保育分野と学習分野を関連させている。体系化されたものは、「学びの概要」として、幼稚園・小学校9年間で育てたい資質能力や教育内容の概略を分野ごとに一覧表した。

その後、同校では、平成17年度(2006年度)から「協同して学びを生み出す子どもを育てる—幼・小・中12年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラム研究開発—」というテーマで、中学校の教科教育の立場からのまなざしが加わり、幼・小・中の発達を見渡した適時性・連続性を吟味・検討し、中学まで含めた12年間の教育課程開発を行なっている。これの実践研究をまとめたものから、分野ごとの単元開発の詳細やその振り返り・評価を読み取ることができる。

4. 特定分野における子どもの発達に着目した研究

① 音楽的能力¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾

三村らは(2008・2009・2010)は、音楽的リテラシーの育成を目指した保幼小連携の音楽カリキュラム開発の

ための基礎的研究として、幼児・児童の音楽的能力の発達の様相を明らかにした。1年次は、4歳児～小学3年生までのピッチング能力（聴いた音高を弁別し、同じ高さで再生する能力）を調査し、子どもの発達の様相を明らかにすることを試みている。その結果、小学3年生になると、個別的な音楽経験の有無による差がほとんどなくなるということが分かった。また、導入時には歌詞の付いた短いフレーズを用いること、カリキュラム初期にはピアノ伴奏は用いない、あるいはピアノによる音取りをしないことがポイントであると指摘している。2年次は、小学1年生を対象に、条件を変えて斉唱することによって、子どもの歌唱がどのように変化するかを明らかにしている。その結果、小学1年生では、旋律が一緒に鳴っていないと、正確に歌唱できないことが明らかになった。3年次は、対象を小学1年生から6年生まで拡大し、学年をおって、児童の歌唱能力がどのように変化するかを検討している。その結果、一斉歌唱を行う場合、基準音はピアノ伴奏の音であると同時に、自分の声でもあることが明らかになった。高学年になるほど、自身の音高感が確立していき、アカペラでも正確に歌えるようになる。低学年においては、片耳をふさいで自分の声を聴かせることで、正確な音高で歌うことができるようになることが明らかになった。

② 理数能力²¹⁾

佐々木(2007)は、探究活動の中で理数能力を高めるための幼稚園と小学校の接続カリキュラムの編成と教育内容の開発を目的として研究を行なった。5歳児を対象にプールでの水遊びを通して、仲間と一緒にかわり合いながら、水の性質や「浮力」に対する学びにつながっていく姿が示されている。また、園庭の植物環境であるチューリップを通して、「植える、世話をする、開花、球根を太らせる」という一連の作業を通して、花が水や養分や日光を必要とすることを実感していく姿を示している。このような成果を整理し、幼児の理数能力を高めるための5歳児の教育課程(カリキュラム)を作成し、それをもとに具体的な活動として「水力ロケット遊び」の指導案を作成し、実践、反省・評価している。

③ 空気圧の仕組み²²⁾

鈴木らは(2006)は、幼児期における科学体験を小学4年生での知的学びに継続するために必要な手立てを明らかにすることを目的とした研究の一環として、飛ぶことを支える「空気圧」のしくみに焦点を当てた。まず、5歳児と小学4年生での「空気圧」への理解を比較することを通して、幼児の「空気圧」理解の特徴を示している。それを踏まえて、これまで幼稚園ではあまり実践されて

こなかった「ペットボトルロケット遊び」を教材とした保育実践を、4歳児を対象に行っている。そこでの幼児の発話を分析し、「水と空気の量に関する気づき(要因への理解)」、「飛ばすエネルギーに関する気づき(エネルギーへの理解)」について検討し、幼児の科学体験が児童期の知的学びへとつながるための保育者の手立てについて考察している。

④ 幼稚園「数量・形」と小学校「算数」²³⁾

船越ら(2010)は、「源数学」に着目し、幼稚園の「数量・形」と小学校の「算数」の学びを一貫させた幼小連携カリキュラム開発のための課題を明らかにした。幼稚園においては、好きな遊びや設定保育の時間において、「数量・形」特に「源数学」に関する子どもの経験の実際を示している。小学校においては、実際に「源数学」を扱った「算数」の授業の取り組みを分析している。それらを通して、幼稚園では、数量と図形の指導法を研究することや、遊びの中での源数学的な要素を掘り起こす必要性を指摘している。また、小学校では、「算数」の授業の実態把握から、幼稚園の学びに求められる経験を示す必要性を指摘している。

5. 同一教材・題材に着目した研究

① 絵本「おおきなかぶ」²⁴⁾

深澤・大本(2004)は、小学校教材としても取り扱われ、また保育所・幼稚園で「読み聞かせ」等で使用される絵本「おおきなかぶ」をてがかりに、保幼と小の「隔たり」の実相を探り、接続の可能性について検討している。「幼稚園教育要領」の「言葉」「表現」と、学習指導要領の「国語」小学1・2年生の中から、「おおきなかぶ」と関連すると思われる項目を抜き出し、比較することで、その位置づけを検討している。さらに、保幼と小における「おおきなかぶ」の実践展開過程を比較・分析することを通して、動作化・劇遊びは、保幼小接続を視点とした授業づくりを構想するうえで、鍵になる総合的な活動になると指摘している。また、実践事例を分析することで、接続するうえでの視点を検討している。

② 生活カレンダーづくり²⁵⁾

橋本(2005)は、鳴門教育大学教育学部附属幼稚園が実践した「生活カレンダーづくり」を研究対象題材にしている。「カレンダーづくり」による教育的効果の分析と、子どもの生活体験を重視した実践を示すことで小学校・幼稚園の教員に「幼小連携の教育活動の必要性」と「連携に果たす造形教育の役割」を再認識させることを研究目的とした。幼稚園5歳児と小学2年生との合同実践を、「環境との共感する力」「環境についての探究する力」

「環境のために行動する力」の3視点を中心として、その教育的成果を読み取っている。その結果、幼小連携の造形活動は「環境にかかわる力」の育成に役立つと共に、造形という窓で連携を構成するメリットが再確認できたと述べている。

IV. 「接続期」に着目した研究

① 小学校における大単元の開発²⁶⁾

佐藤(2010)は、お茶の水女子大学附属幼稚園と小学校の実践研究において設定された「接続期」、特に小学校入学後からゴールデンウィークまでの「接続中期」に焦点をあて、秦野市の公立小学校の生活科の実践をもとに、接続期の教育課程(カリキュラム)について検討している。

生活科の既存の単元「学校探検」を、他教科(体育・音楽・国語・算数等)と関連付けることで、大単元「がっこうだいすき」を構成していく過程を分析している。大単元を構成することは、分断された教科学習をつなげ、子どもたちの興味・関心を生かしながら、学ぶ楽しさを味わうことにつながるのではないかと指摘している。今後、大単元の構想を実践し、検証していくことが課題であり、それが真の意味での接続期のカリキュラム創造につながるのではないかと結論づけている。

② 幼小を「つなぐ視点」²⁷⁾

井口(2013)は、東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎において、卒業間近の5歳児の保育観察と担任保育者とのカンファレンスで話し合われた93事例を27項目に分類することで、「幼保小接続期の保育・教育をつなぐ視点」を開発している。この「つなぐ視点」を活用して、東京学芸大学附属竹早小学校、入学間近の小学1年生の授業観察を行なった。その結果、小学1年生の担任は、5歳児担任よりも物的環境を重視せず、言葉だけで説明する傾向があることが明らかになっている。

また、5歳児後半のカプラ遊びを観察することを通して、「つなぐ視点」の改良を試み、小学1年生入学始期における一斉活動としてのカプラ遊びを観察を行なった。改良版「つなぐ視点」を活用した分析を通して、1年生担任はカプラという「遊具」に対して、様々な学びを生み出す「教材」としての価値づけの弱いことを指摘している。

③ 汎用性のある幼小接続カリキュラム²⁸⁾

善野(2010)は、地域の特色や学校園の幼児・児童の実態を反映したカリキュラム作成のベースとなる、子どもの発達を踏まえた「汎用性のある幼小接続カリキュラ

ム」を作成している。発達に即した「育てたい姿」と「内容」を設定し、幼稚園5歳児2月末から小学1学年5月1週までの「接続期7週間モデル案」として示した。その際、幼児期から小学校にかけて育てたい力は「自立」と「協同」であるとし、5歳児に見られる自立と協同の姿を小学1学年の学習にどのようにつなげていくのか、共通理解を図ることが重要であると指摘している。

④ 地方自治体による接続期のカリキュラム

一前・秋田(2012)²⁹⁾は、5地方自治体の接続期カリキュラムの特徴を整理し、接続期カリキュラムの中で育てたい子どもの力として、「学習への意欲」、「規範意識」、「主体性」があげられ、自治体によって重視している力が異なっていることを指摘している。特に、複数の地方自治体で育てたい力ととらえている規範意識は、共通している要素もみられるが、質の異なる要素もみられたことが示されている。さらに、抽象的に示されている子どもの力を具体的にどのような体験によって育てていくのかという方針が自治体によって特色がみられたことも指摘されている。

松崎・無藤(2013)³⁰⁾は、幼児教育と生活科教育とのつながりに焦点を当て、先駆的な品川区、横浜市、東京都北区のカリキュラムを整理し、アプローチとカリキュラムからスタートカリキュラムへのつながりを明らかにしながら、接続期における生活科の役割について指摘している。3つの自治体のアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを比較したところ、3つともアプローチカリキュラムは小学校生活を始めるまでに身につけておきたい「自立」や「社会性」に関する事柄が中心であるが、スタートカリキュラムでは「育てたい」と考えるもの、教育課程の具体的な目標や目指す子どもの姿が異なっていることを示している。

V. 「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」における教育内容の比較

① 造形遊び³¹⁾

栗山・武田(2006)は、造形表現領域において幼児教育と小学校教育を滑らかに接続させるカリキュラムを編成するうえで必要とされることを探るため、「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領解説 図画工作編」を資料とし、その教育内容・方法を比較している。その結果、「造形遊び」においては、両者はほぼ共通した活動を有しており、材料選択や工夫する力の育成という点で教育内容に連続性がみられたとし、カリキュラムを編成するうえでの一つの指針になると述べている。また、幼児期後期から児童期前期にかけての子どもの発達特性を踏まえ、

「言語活動」「造形リテラシーの獲得」「協同的な造形活動」という3つをキーワードとして、幼児教育・小学校教育において造形活動に取り組む環境や授業設定が必要であると指摘している。

② 言語活動³²⁾

光野(2010)は、「小学校学習指導要領解説 国語編」と「幼稚園教育要領 領域・言葉」の中から、「言語活動」と関連する内容を比較し、領域「言葉」が小学校教育におけるすべての教科・領域につながることを指摘している。それを踏まえ、幼小連携を活動レベルの連携ではなく、その根本となる発達の連続性というレベルでの連携指導を考えていく必要性について言及し、幼小の教員がそのことを具体的に理解できるようにするための合同研修向け資料として、同一教材「この音なあに」を開発している。これは、幼稚園5歳児と小学1年生「国語科」を対象にした教材で、幼小の言葉の発達の連続性と指導内容や方法の「段差」を明確になることで、それぞれの指導の在り方が明確になることをねらったものである。

VI. まとめ

ここまで個別の研究内容の整理を行ってきたが、これらの研究の積み重ねの過程や成果のつながりを示したものが図1である。図1は、教育課程の編成を、幼稚園では「保育内容→保育環境・方法→教材」、小学校では「教育内容→分野・科目→単元・大単元→指導法→教材」と

いうプロセスで示している。さらに、〈幼小教員同士の共通理解・共通認識〉、〈学びや経験のつながり〉、〈「接続期」〉、3つの視点からこのプロセスとのつながりを示した。

以下では、個別の研究内容・成果のポイントを示しながら、〈幼小教員同士の共通理解・共通認識〉、〈学びや経験のつながり〉、〈「接続期」〉の3つの視点から幼小における教育課程の接続に必要な方策について検討する。

1. 幼小教員同士の共通理解・共通認識の促進

交流活動を通して、有馬幼稚園・小学校の実践では、「学びをつなぐ」という視点を教師同士が相互理解しながら³³⁾、プロジェクト型の交流を単元としての交流活動にまで位置づけている。兵庫教育大学附属幼稚園・小学校の実践では、交流活動において、幼小共同の保育指導案を作成しており、これは保育方法や指導方法の共通理解を促すことにつながったと考えられる。なお、本研究で示した交流活動を通じた教育課程編成・開発を目的とした、上述の2実践(有馬幼稚園・小学校、兵庫教育大学附属幼稚園・小学校)と、山梨大学附属幼稚園・小学校、北海道大学附属函館幼稚園・小学校の実践は、すべて教育課程の編成にまでは至っていない。しかしながら、子ども同士の交流活動を通して行われた教育課程の編成を目的とした実践研究は、教員が幼小間における教育への考え方や価値観の違いに出会う機会になっており、教員同士の保育方法や指導方法への共通理解や共通認識を促進することにつながっていることが示唆される。また、指導の在り方について共通理解を深めるための別の手立

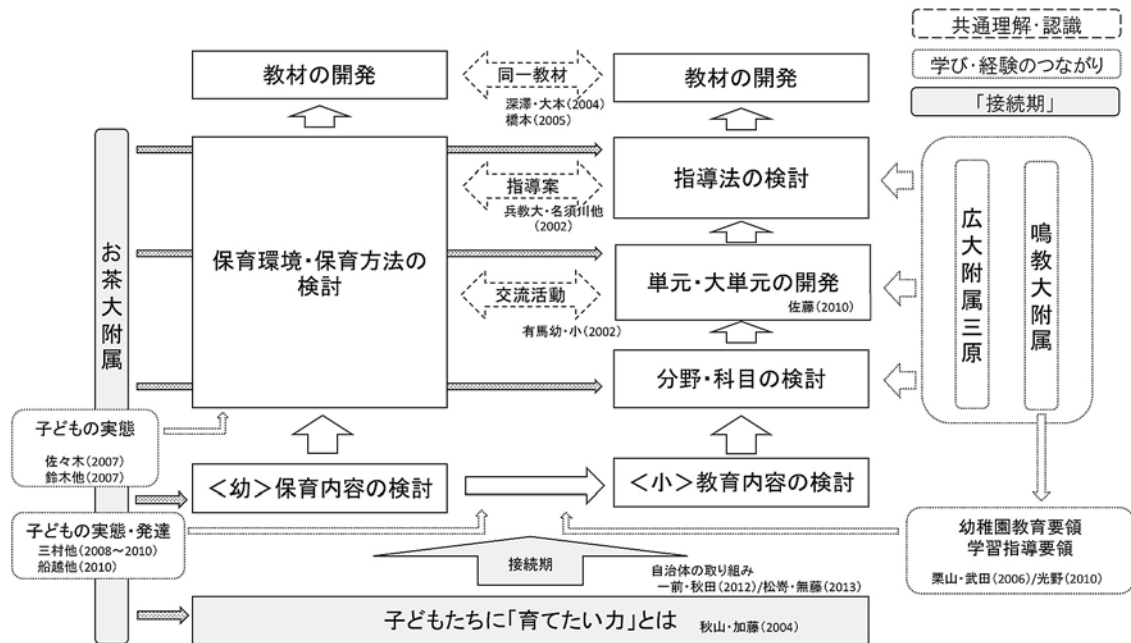


図1 幼小接続における教育課程の編成に関する研究成果

てとして、幼小において同一教材を用いての指導計画にそった実践も有効であることも示唆された(Ⅲ.5)。このような、保育方法や指導方法への共通理解や共通認識を促進することにつながる取り組みは、教育に対する考え方や価値観のみならず、幼小双方の組織のあり方や文化を問直す手がかりを得ることにもなると考えられる。

2. 学びや経験のつながりへの理解

小学校に新科目を設置した鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園・小学校の実践では、小学1年生の学習を教科の枠を取り外し、幼稚園で培われた「生活的な学び」を重視する「生活学習」を位置づけ、教育課程の編成を試み、単元開発や指導案作成を行っている。鳴教大では、その最初のステップとして、幼稚園教育要領の「領域」と小学校学習指導要領の各教科の記述を比較し、そのつながりを検討し、学びの連続性を確認している。このような作業は、有馬幼稚園・小学校の実践や、実践研究ではないが、栗山・武田(2006)³⁵⁾、光野(2010)³⁶⁾においてもみられ、幼児期から児童期への学びや経験のつながりを理解することになると考えられる。同様の手立てとして、様々な視点から子どもの発達への理解や実態把握を通して、教育課程を編成するうえでの課題を明らかにすることも有効であることも示された(Ⅲ.4)。井口(2013)³⁷⁾の取り組みも、幼小教師間の話し合いを通して、学びや経験のつながりを理解しようとする試みであったと考えられる。また、幼稚園における「領域」と小学校における「教科」の比較・検討は、教育課程における幼小の枠組みの違いを理解し、その違いへの対応策を考えることを通して、教育内容を見直す手がかりになると考えられる。

広島大学附属三原幼稚園・小学校の実践でも、小学校に新科目を設置し、小学校につながる幼稚園、幼稚園からつながる小学校という見方で教育内容を検討し、カリキュラム試案(目標・単元開発・題材設定)を作成、効果の検証まで行っている。しかし、2実践(鳴教大・広大三原)共に、幼稚園においては教育課程の編成には至っておらず、また、幼稚園の教育課程全体と小学校の教育課程全体を接続しているわけではない。しかしながら、3年間の幼稚園生活と、6年間の小学校生活とが連続した教育の期間であると考えたとき、9年間を見通した教育課程の編成は当然のことであるといえる³⁸⁾。また、幼稚園・小学校の現行のカリキュラムにおいて大切に考えられていることはそのままに、その間にある「段差」を「接続」させ、子どもが幼稚園教育から小学校教育へと円滑に移行できるような、「あいだ」のカリキュラムの編成も必要である³⁹⁾。

3. 「接続期」の有効性

上記の考えを踏襲した方策が、「接続期」という概念を生み出したお茶の水女子大学附属幼稚園・附属小学校の取り組みである。お茶大附属では、「幼稚園→接続期→小学校」という筋道に立ち、幼児教育と小学校教育の教育課程全体を「接続」という考えに基づき、育てたい資質能力や教育内容を整理し、9年間を見通した教育課程が編成されていた。幼小間に「接続期」を設定することで、育てたい力が明確になり、それを土台として、「教育内容→分野・科目の検討→単元・大単元の開発→指導法の検討」というように、子どもの実態にあわせたボトムアップの教育課程編成が実現していると思われる(図1)。秋山・加藤(2004)³⁴⁾も、山梨大学附属幼稚園・小学校の実践を通して、「接続期」の子どもたちに育てたい力は何かを、幼小の教師間で共通認識されることの重要性を指摘している。佐藤(2010)⁴⁰⁾は、「接続中期」に焦点を当て、生活科の単元を他教科と関連付けることで大単元を開発した実践を報告しているが、5歳児後半の「接続初期」を踏まえたボトムアップの視点からの検討も必要であると考えられる。

また、お茶大附属は、幼稚園から小学校・中学校という一貫した教育組織のなかで進められた取り組みである。しかし、多くの幼稚園や小学校は別組織の中で双方が模索をしなければならない状況にある。別組織である各幼稚園や各小学校をつなぐためには、組織が所属する自治体が地域の特色を踏まえた教育課程の具体的な目標や子どもの姿を明示し、編成するうえでの方針や枠組みを示すが必要になる。2010年に出された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」には、自治体が連携・接続に関する基本方針や支援方策を策定し、各学校・施設はそれを踏まえて連携や接続に取り組むことが望ましいことが明記されている。一前・秋田(2012)⁴¹⁾や松寄・無藤(2013)⁴²⁾で取り上げられている複数の自治体の取り組みでは、全ての園・学校を対象として接続期の教育課程を作成し、実施していた。また、善野(2010)⁴³⁾は、「接続期」7週間に焦点をあて、地域性や子どもの実態を反映した教育課程を作成するためのベースとなる、子どもの発達を踏まえた「汎用性のある幼小接続カリキュラム」を作成している。

しかしながら、意味のある連携・接続にしていくためには、教員同士が異校種に対する共通理解・共通認識をもつことや、幼小間での学び・経験のつながりや子どもの発達・実態を理解することの必要性がこれまでの整理(VI.1・VI.2・図1)から示唆される。したがって、各自治体が策定した基本方針や支援方策に従い、提示された「接続期」を中心とした教育課程に則って、保育・教育に取り組むことが連携や接続の真の意味するところではな

い。各自治体から提示された教育課程を基本としながらも、子ども同士の交流活動や合同授業等の実践において、幼小双方の教員による保育環境・方法や教育方法(分野・科目、単元・大単元、指導法)の検討というプロセスを経ることで、事実裏打ちされた新たな教育課程編成が実現されると思われる(図1参照)。これは、幼小双方の教員による育てたい子どもの姿を土台にした教育課程編成であると共に、子どもの実態把握から創りあげられるボトムアップの教育課程であると言える。

引用文献

- 1) 石井英真 (2006), 「幼小接続における接続の問題—カリキュラムの接続を実現する方法—」, 『教育方法の探究』, pp. 17-24.
- 2) 横井紘子 (2007), 「幼小連携における『接続期』の創造と展開」, 『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』, 4, pp. 45-52.
- 3) 横井紘子・酒井朗 (2005), 「幼児教育と小学校教育をつなぐ—幼小連携の現状と課題—」, 『都道府県・政令指定都市教育委員会調査報告』
- 4) 小谷宜路 (2004), 「わが国における『幼小連携』研究をめぐる史の変遷」, 『幼年児童教育研究』, 16, pp. 33-44.
- 5) 1) 前掲
- 6) 酒井朗・横井紘子 (2011), 「保幼小連携の原理と実践—移行期の子どもへの支援—」, ミネルヴァ書房 pp. 74-77.
- 7) 有馬幼稚園・小学校・秋田喜代美 (2002), 「幼小連携カリキュラムづくりと実践事例」, 小学館.
- 8) 名須川知子・田中貴子・井上千恵子・多田琴子・林久子・上月康代・小林みどり・鈴木光男・門田モトミ・渡邊裕子・吉栖和哉 (2002), 「幼小連携カリキュラム開発に関する研究」, 『学校教育学研究』, 14, pp. 57-67.
- 9) 秋山麻実・加藤繁美 (2004), 「幼小連携で創造する保育・教育カリキュラム」, 『山梨大学教育人間科学部紀要』, 6(1), pp. 105-115.
- 10) 原子はるみ・小林恵理子・阿部敦子・中村誠司・小柳未来・伊藤勝志 (2004), 「幼小連携教育を推進するための基礎的研究」, 『北海道教育大学教育実践総合センター紀要』, 5, pp. 143-150.
- 11) 佐々木宏子・鳴門教育大学附属幼稚園 (2004), 「なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム—」, チャイルド本社.
- 12) 井上弥・朝倉淳・石井信孝・井上由子・江本繁子・掛志穂・中山美充子・宮本浩嗣・村上忠君 (2004), 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (2)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 33, pp. 107-116.
- 13) 井上弥・朝倉淳・池田明子・掛志穂・久原有貴・弓場奈穂子・青原栄子・石井信孝・加藤桂子・村上忠君 (2005), 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (3)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 34, pp. 197-206.
- 14) 井上弥・朝倉淳・掛志穂・君岡智央・石井信孝・大橋美代子・加藤桂子・吉岡健太郎 (2006), 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (4)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 35, pp. 19-28.
- 15) 井上弥・朝倉淳・池田明子・君岡智央・青原栄子・石井信孝・加藤桂子・金田敏治 (2007), 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (5)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 36, pp. 135-144.
- 16) 井上弥・朝倉淳・池田明子・君岡智央・中山美充子・青原栄子・石井信孝・大橋美代子・金田敏治 (2008), 「子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (6)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 37, pp. 205-210.
- 17) お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター (2008), 『『接続期』をつくる』, 東洋館出版社.
- 18) 三村真弓・青原栄子・高旗健次・金岡美幸・大橋美代子・池田明子・吉原智恵美・掛志穂・君岡智央・中山美充子・井上由子・山中覚美・東加奈子・有村由香 (2008), 「幼小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究 (1)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 36, pp. 95-100.
- 19) 三村真弓・青原栄子・高旗健次・金岡美幸・大橋美代子・池田明子・吉原智恵美・掛志穂・君岡智央・中山美充子・井上由子・山中覚美・東加奈子・有村由香 (2009), 「幼小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究 (2)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 37, pp. 145-150.
- 20) 三村真弓・吉富功修・大橋美代子・青原栄子・高旗健次・金岡美幸・池田明子・吉原智恵美・掛志穂・君岡智央・中山美充子・井上由子・坪田志保・山中覚美・東加奈子・宮谷智子 (2010), 「幼小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究 (3)」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 38, pp. 87-92.
- 21) 佐々木晃 (2007), 「子どもの理数能力を高める幼小連携教育課程の開発に向けて: 5歳児期における教育課程の構造と展開」, 『鳴門教育大学学校教育研究紀要』, 22, pp. 111-118.
- 22) 鈴木由美子・清水鉄也・財満由美子・松本信吾・管田直江・三宅瑞穂・林よし恵・西井章司 (2006), 「科学的思考を育成するための幼小連携の在り方について: 科学体験から知的学びへの幼小一貫教育の提案」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 35, pp. 29-36.
- 23) 船越俊介・白川蓉子・澤田淳・福田裕美・中塚景子・上

- 埜吉美・西川千津・穴田恭輔 (2010), 「幼稚園における「数量・形」と小学校での「算数」の学びをつなげる幼小連携カリキュラムの開発に関する予備的研究」, 『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』, 46, pp. 83-94.
- 24) 深澤広明・大本紀子 (2004), 「共通教材にもとづく保幼・小連携の教育方法的検討:『おおきなかぶ』の実践記録の比較をてがかりに」, 『広島大学 幼年教育研究年報』, 26, pp. 11-20.
- 25) 橋本忠和 (2005), 「幼小連携におけるカレンダーづくりの教育的効果の研究」, 『美術教育学研究』, 26, pp. 303-317.
- 26) 佐藤康富 (2010), 「幼小の接続期におけるカリキュラムに関する一考察」, 『鎌倉女子大学紀要』, 17, pp. 113-120.
- 27) 井口眞美 (2013), 「幼保小接続期の保育・教育をつなぐ視点の開発(その1) —5歳児の木製遊具(カプラ)での遊びの観察から—」, 『実践女子大学生生活科学部紀要』, 59, pp. 11-20.
- 28) 善野八千子(2010), 「幼小接続期におけるカリキュラム開発」, 『奈良文化女子短期大学紀要』, 41, pp.49-67.
- 29) 一前春子・秋田喜代美 (2012), 「全国地方自治体による幼小接続期カリキュラム開発の検討」, 『国際幼児教育研究』, 20, pp. 85-95.
- 30) 松崎洋子・無藤隆 (2013), 「小学校生活科と幼児教育とのつながり—接続期カリキュラムの検討をとおして—」, 『白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報』, 18, pp. 39-46.
- 31) 栗山誠、武田信吾 (2006), 「幼児の造形活動と低学年図画工作科の現状比較……教育内容・方法の分析と、この時期の発達の特徴」, 『大阪総合保育大学紀要』, 1, pp. 57-76.
- 32) 光野公司郎 (2010), 「小学校第1学年の「国語科」と幼稚園5歳児の領域「言葉」との連携指導の在り方:同一教材「この音なあに」の指導計画作成をとおして」, 『東京未来大学研究紀要』, 3, pp. 67-76.
- 33) 2) 前掲
- 34) 9) 前掲
- 35) 31) 前掲
- 36) 32) 前掲
- 37) 27) 前掲
- 38) 福崎淳子・高梨珪子(2010), 「幼稚園における幼児の言葉の育ちを小学校教育へとつながるための課題—なめらかな接続をめざして—」, 『東京未来大学研究紀要』, 3, pp. 57-65.
- 39) 2) 前掲
- 40) 26) 前掲
- 41) 29) 前掲
- 42) 30) 前掲
- 43) 28) 前掲